

平成29年度 下焼ス遺跡 発掘調査 現地説明会

平成29年7月22日(土)
倉吉市教育委員会 文化財課

はじめに

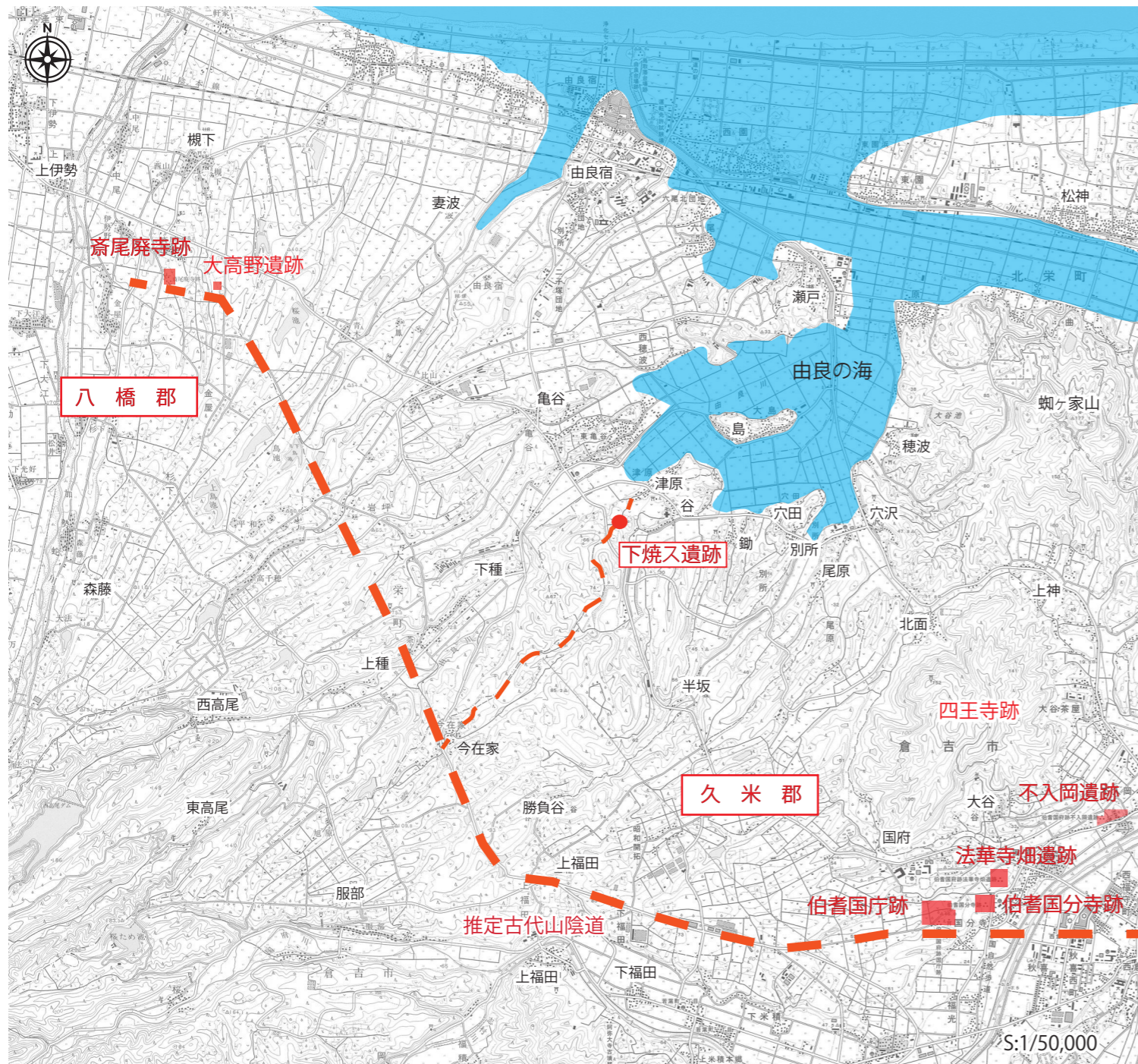
下焼ス遺跡は、県道倉吉東伯線の改良工事に伴い、平成28年12月から倉吉市教育委員会が発掘調査を実施しています。

現在までの調査で、縄文時代から平安時代までの遺構や遺物が確認できました。

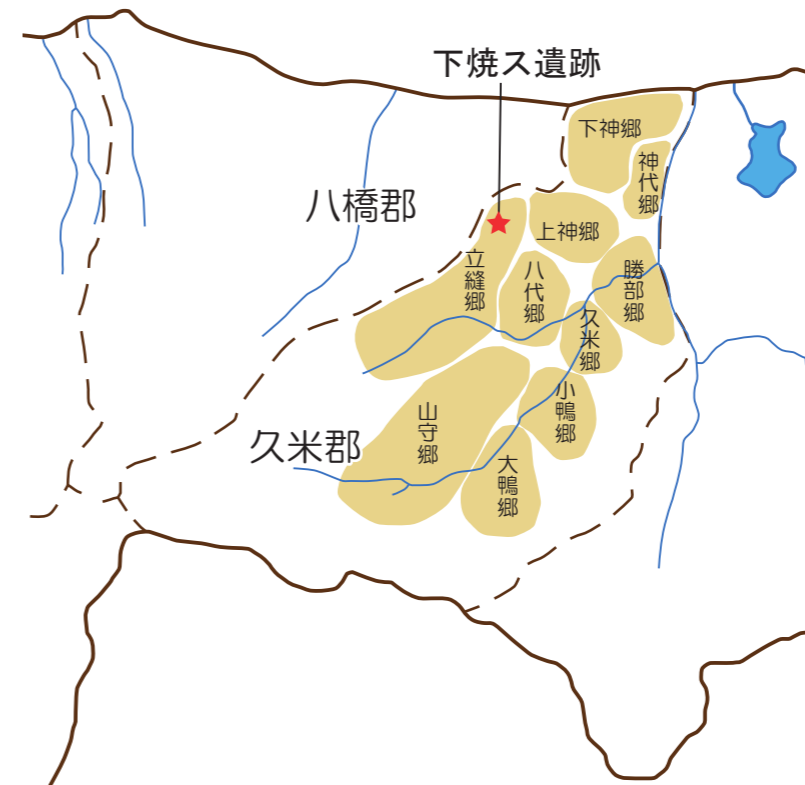
主な遺構として、弥生時代後期や古墳時代前期の竪穴建物跡3棟、奈良時代から平安時代にかけて使われたと考えられる道路遺構を確認しました。

当遺跡は、倉吉市街地から北西に約7km離れた倉吉市津原字下焼スにあります。なだらかな丘陵の北端に位置し、丘陵の北側には日本海にそそぐ由良川を中心に低湿地が広がっています。古代の行政区画では久米郡立縫郷にあたります。

伯耆国庁跡から北西約4kmの位置にある津原の地には、その名が示すとおり津（船着き場）があったと考えられ、実際に津原北側の低湿地はかつて入海になっていました。



古代の津原周辺



久米郡の郷名（新編倉吉市史 第1巻古代編より）



写真1：道路遺構（東から撮影）

おわりに

今回見つかった道路遺構の延長を推測すると、北東端は丘陵を下り津にたどり着き、南西端は下焼ス遺跡から南西約2kmにある今在家方面に向かうルートが考えられます。

今在家は古代山陰道の推定ルート上にあり、東は伯耆国庁跡へ、西は八橋郡衙、斎尾廃寺跡につながります。

下焼ス遺跡の道路遺構はかつての入海と古代山陰道をつなぐ道路と推測でき、津原と伯耆国庁のつながりを考えるための貴重な発見となりました。

道路遺構（路面）

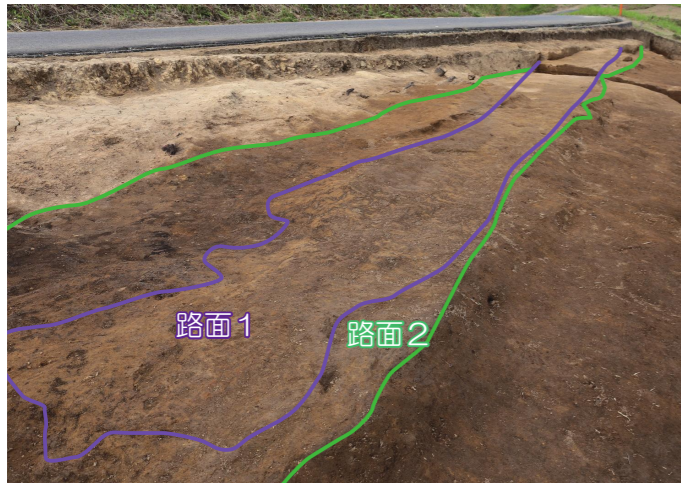


写真2：硬化した路面（南西から撮影）

現在の地表面から20cmほど掘り下げると、硬化した平坦な面が見つかりました。

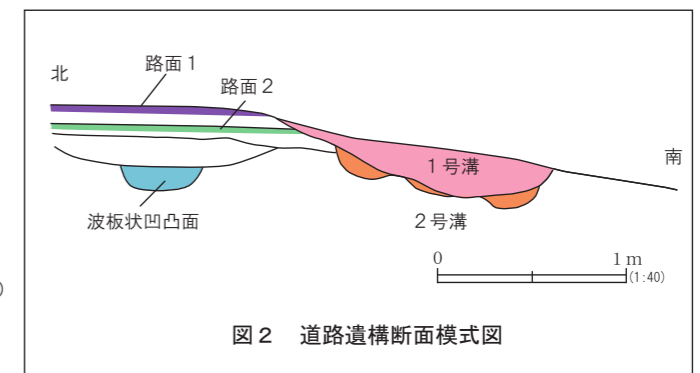
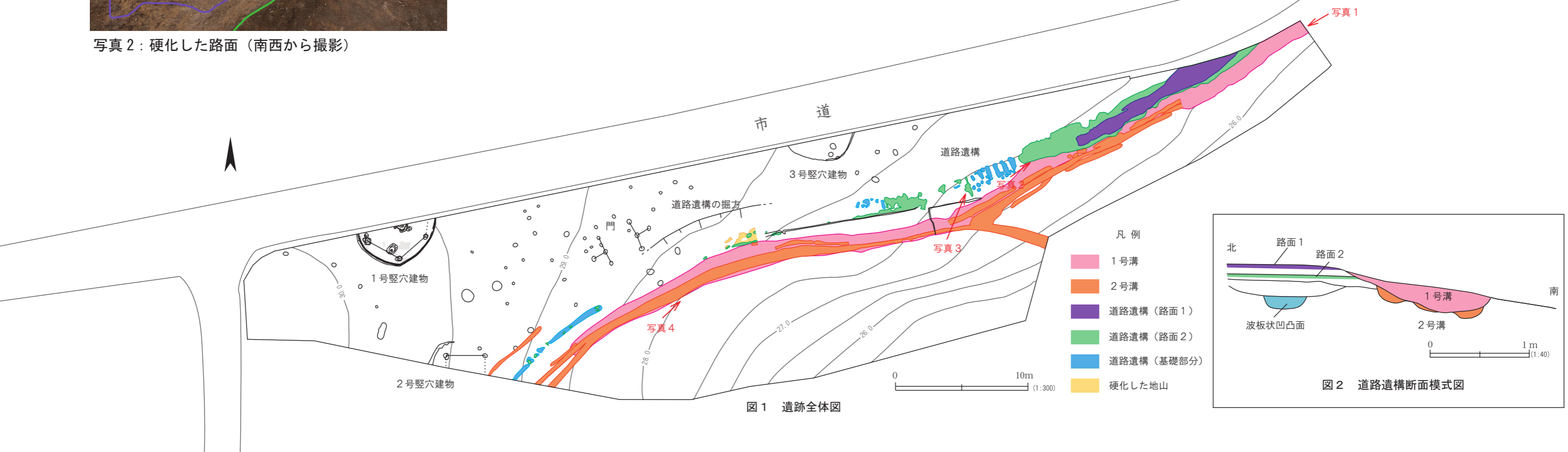
これは道路遺構の路面に当たり、最大幅約2.1m、長さ約20mが確認できました。

硬化面は大きく分けて2層の重なりがあり、上の層は灰色の土（路面1）、下の層は黒色の土（路面2）が硬化しています。

黒色の土で作られた路面2を、後の時代に灰色の路面1で補修したのと考えています。

道路遺構は総延長が約64m、東西の高低差は約2mあります。

倉吉市内で確認された9遺跡（12例目）のなかで最も長い道路遺構となりました。



道路遺構に並行する溝

道路遺構の南側には、並行して溝が掘られています（1号溝）。

最大幅約2m、長さ約64m、深さ約40cmで、硬化した路面の南側を削るように並行しているため、路面が作られた時代より後に掘られた溝と考えられます。

溝からは9世紀後半から10世紀前半の赤く塗られた土師器の坏や、転用硯（須恵器の皿を硯に転用）が出土しています。

地山の面にまで達する1号溝を掘りあげると、底面で幅約20cmの硬化した溝が複数見つかりました（2号溝）。

硬化面や波板状凹凸面からなる道路が何らかの理由で使われなくなり、それに沿って作られた1号溝の底を道路として使った可能性が考えられます。



写真4：1号溝（西から撮影）

道路遺構（基礎部分）

重機による削平を受けて硬化面がはがされた地山の面では、部分的に円形や楕円形の痕跡が連なって見えています。

「波板状凹凸面」と呼ばれるこの痕跡は、道路遺構の基礎部分と考えられ、これは古代道路特有の構造です。

幅約30cm、長さ約1.1mの楕円形の穴を掘り、別の土で埋め戻して固い地盤を作っています。



写真3：波板状凹凸面（南西から撮影）